

平塚らいてうの会ニュース

新春対談



永橋為成さん
米田佐代子さん

●東日本大震災から学ぶもの

永橋・米田 新年おめでとうございます。

米田 昨年は、東日本大震災と福島原発事故で日本中が大きな衝撃を受けた年でした。一方、らいてうの会は「青鞥」創刊百周年をむかえて、「百年のわたちのメッセージを聴く」をテーマにいくつかのイベントにとりくんできましたが、この二つが同じ年だったというのは偶然ではない、「青鞥」の女性たちの訴えは、いまの私たちの生き方への呼びかけなのだという気がしてきましたですね。震災で家や家族を失ったばかりか、暮らしてい

た地域そのものが消失してしまい、残された土地も放射能汚染で帰ることさえできない。その人びとの思いを抱きとめながら、私たちはどう生きていけばいいのかが問われていると思います。

「らいてうの家」建設の時、私たちを励まし応援してくださった永橋さんに、建築家としてまたふるさと逗子で、地域のみなさんとともに地域づくりを実践しておられる立場から、「3・11」の経験から何を学ぶかを伺い、「青鞥」百年のいま、先人たちから何を聴き取るか、考えたいと思います。

永橋 らいてうさんは「平和・協同・自然」を言われましたが、自然のリズム、過酷な摂理をあらためて考えさせられました。日本は江戸時代の町を見ると、自然条件を活用し、人の暮らしと生業を支えることを目的とした都市計画がなされてきました。しかし第二次大戦後のまちづくりは、東京が最たるものですが、そうした伝統を顧みず、風土を無視して、経済成長を目的としたさまざまな都市づくりです。

3・11であの地域が消失してしまったとき、被災した方々のふるさとの再建・復興はどうあればいいのかと考えさせられます。今回の大震災は、わたしたちのまちの現状、自然、風土、歴史、伝統などをあらためて見直してまちづくりを考えることを自然が厳格な問いかけをした、そんな思い

がします。

なお、この度の原発事故には特別な思いがあります。私は小学2年生のとき、広島県田島で原爆に遭遇し、長い間、放射能汚染の不安がありました。1980年に、核兵器の廃絶を求める建築人の会を立ち上げたことなどありますが、人間が制御できない原発利用を反省して撤退する時と考えます。

米田 永橋さんは「建築の真髄は住まいを考えることだ」と、いつておられますが、確かにいまの「仮設住宅」などをみると、人が暮らす住まいに感じますね。

永橋 「仮設住宅」ではなく復興事業の共同を支える「復興住宅」としたいものです。被災された方々が安心して、人生を生き通すことができる住まいづくり、ふるさとづくりをしなければなりません。離れて暮らしている人たちとも連絡しあい、被災者の声を集約して復興することが大事なことです。居住は人の生存の基盤であり基本的権利です。行政にはそれを保証する責務があります。

●住まいづくりはまちづくり

米田 らいてうは1923年の関東大震災を経験していますが、そのとき東京連合婦人会という主義主張を越えた女性団体の連合体ができ、救援ボランティアをやりました。らいてうは女性たちが相愛共助の精神で共同行動したことを高く評価しています。暮らしを再建していく時、元通りになるという保障はないわけです。でもそこで自分

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

たちの人間らしい生活を取り戻そうとする時、男性も勿論ですが、なによりも女性がその活動に参加していかなくてはいけないのじゃないかと思えます。

永橋 らいてうさんは「消費組合我らの家」の活動をされたそうですが、住まいづくりはその地域に住む人々が共同して生きるまちづくりと考えます。

建築家も自分の論理で設計するのではなく、そこに住む人、使う人の立場で考え、関係者が共同して、学習しながら進める共同設計をしたいものです。

米田 同感ですね。救済物資も必要な所に必要なだけ届かないとダメなんです。若いママたちが紙オムツだけでなく、赤ちゃんに必要なものを一緒に箱詰めして一人分ずつ何組も届けたらすごく喜ばれたそうですが、そういう発想が大事だと思います。自分の暮らしの中から気がついたことを、ただ心くばりだけするだけでなく、それを一つの政策にすることが大切だと思えます。それには女性たちが政策をつくる場所にいる必要がある。

百年前、「元始女性は太陽であった」と書いたらいてうは、「女が自分の思ったことをどしどし言っていけば、必ず本物がでてくる」といっています。

永橋 そこで住む人の思いや意見を聞かずに住まいやまちの設計なんかありません。今回は特に、被災者の声をよく聞いて、何が必要なのかをまず行政に反映させる事が大事だと思います。

一昨年、私は二十年振りに、ふるさとの逗子に帰ってきました。そこで、NPO法人「逗子の文

化をつなぎ広め深める会」（略称逗子文化の会）に関わっています。

米田 まちづくりの基本は「文化」であり、そこに住む人間の暮らしそのものが文化なのです。

永橋 いま、文化の会では毎月、逗子在住の多彩な人々によるカルチャー・フォーラムを開催しています。「三浦半島のキリシタン」「建築から見た東西文化比較論」「地名の不思議 まず池子から」「朝顔このしたたかな植物」「福祉タクシーは誰が始めたか」「現代中国を読み解く」「医療ロボットが拓く未来」などなど、この一月で42回になります。

逗子市では2003年に、まちづくり基本計画市民会議が結成され、公募に応じた130名の市民が2年間にわたり話し合い、市長に提出した素案が2007年に策定されました。その中に、半径300メートル位の中心に「ふれあい活動センター」のある福祉のまちづくりが謳われ、また、計画の実効性をあげるための仕組みとして市民の見守り隊が組織されて、市民と行政の協働の取り組みが進められています。

● らいてうが望んだ平和と協同を

米田 「らいてうの家」は、らいてうさんがあそこに土地をもっていたから上田市真田町に建てたのですが、ただ展示をして見学してもらうだけではなく、「家」を拠点にいろいろな活動をしています。昨年は、『青鞥』百年行事のほかに、「子どもまつり」などもやったのですが、なぜらいてうの会が子ども祭りを？と聞かれました。「らいてうは、自分の子育てを通して、女性がわが子だ

けでなく、すべての子どもを守らなくてはならないということをつかんでいた人。『子どもの権利条約』に子どもには人類の最善のものを与えるべきとあるが、それがらいてうの精神なのだ」といったら、感心してくれました。

ほかにも地域のお年寄りをお招きして「昔語りの会」をやったり、昔、信州と上州をつないでいた「大笹街道」を訪ねたり、地域と「家」をつなぐ活動がひろがっています。らいてうの家をひらいて6年、地域のみなさんとともに支えてきた。「家」が、そういう方向にたどり着いたのだと思います。そういう視線で地域を見直していくと、それがまた、自分の暮らしを見直すきっかけになるかもしれない、らいてうが望んだ、平和と協同の世界の理想を、足元の事実で見つけてきたのではないかという気がします。

永橋 暮らしの新しい絆づくりでしょうか。もしいま、らいてうさんが生きていて、あそこに住んでいたなら、そういうことをやっていると思えますよ。

米田 今日は長時間、ありがとうございました。

2012年 らいてう講座のお知らせ

日時 2012年2月18日(土) 1:30~
場所 東京・ウイメンズプラザ
テーマ 戦争と女性たちー過去からの声を聴く
講師 梯 久美子さん(ドキュメント作家)
「散るぞ悲しき硫黄島総指揮官・栗林忠道」で
大宅壮一ノンフィクション賞を受賞 他著書多数

「昔語りの会」その3

真田地域に生きた女性たちの戦前・戦後



上田市真田町は平成18年、上田市と合併し、現在に至っています。真田町は、長村、傍陽村、本原村の三村が昭和33年（1958年）合併して真田町となりました。この地域で戦前・戦中・戦後を

暮らしてこられた四人の女性を昨年の10月23日、「らいてうの家」にお招きし、お話を聞かせていただきました。周囲の山々は紅葉も美しく、秋も深まった日で、「家」ではペレットストーブが赤々と燃え、暖かい雰囲気につつまれていました。

鈴木もとえさんは大正8年生まれ、日本刺繍を50年仕事にしていました。牧内房子さんは大正12年生まれ、戦前・戦中小学校の教師でした。松尾玉枝さんは大正14年生まれ、婦人会活動を励んできました。神津町江さんは大正15年生まれ、和裁を25年仕事とし弟子を取り指導されてきました。大正時代にはこのあたりも養蚕が盛んでしたが、なんととっても農村地域は貧しく、みなさんきびしい時代を生き抜いて、家族のために働いてこられた思いを、一人ひとり話していただきました。

地域と協同、多彩なとりくみ

当時の村は80%以上が森林に囲まれた地域です。戦中は早朝から10キロ以上の道を歩き、山に入り炭焼きをし、その炭俵を背負って帰り、その炭を軍に供出したそうです。「こればかりは男も女も同じ。義務でしたから。お金？もらった覚えはないですね」。松尾玉枝さんの父上は村長を務めておられましたが、村長には報酬がなく奉仕活動だったと聞いてびびくり。村民に切望され、村民のために細かいことにも気を配り、ご苦労されたようでした。

親も出征していったのではないのでしょうか。戦後は食糧不足のため脱脂粉乳を水に溶かしてお釜で煮て学校給食をしたそうです。女性参政権が実現した戦後すぐ、傍陽村では松尾さんともう一人、二人の女性議員が誕生したそうです。「女が村会に出てもお茶汲みぐらい」といわれて「絶対にお茶汲みはしない」と決心、村議としての職務を真摯に頑張った、とのお話にあらためてすばらしい先輩がいたことを実感しました。地域の婦人会も、戦後は食生活改善や健康面の活動など住民生活向上の活動をすすめ、環境問題にも早くから取り組んだというお話も興味深く聞きました。

真田らいてうの会会長 花岡静枝



①森の講座―菅平の歴史と自然散策
「大笹街道をゆく」
昨年10月2日、昔の信州と上州をむすぶ「大笹街道」を訪ね、大好評でした。



②子どもまつり―親子で遊ぼう―
10月16日、真田の古城緑地ひろばで開催、親子でサンディッチ作りや、森あそび、お日さまバンドで歌おうなど、楽しみました。



③冬期で「家」閉館
恒例の大掃除と反省会

昨年は11月7日で「家」は閉館
11月8日大掃除、9日に反省会（写真）を行いました。
来春4月28日オープンまで冬ごもりです。

らいてうさんと茨城・戸田井に疎開

—三浦晴江さんにお話を聞く—

「らいてうさんのお宅でお手伝いさんをしていた人が近所におられます」と電話をいただき、横須賀市大津町にお住まいの三浦晴江（旧姓 根岸）さんにお話をうかがいました。

晴江さんは1925（大正14）年12月生まれ。高等科、補習科を終えた16歳頃、本当はお裁縫を習いたかったけれど、生まれたばかりの赤ちゃんがいる先生のところや、親戚の家に手伝いに行ったりしていました。そんな時、東京・新宿にいる叔母さんから奥村さん宅に行ってみない？と声をかけられたそうです。叔父さんは彫金の仕事をしていたので、奥村博史さんとおなじみだったのかもしれません。



奥村さんの所ではお茶を持っていったり、お使いにいったり。物静かな方で、二人はそれぞれの部屋にいて、あまりしゃべらないみたいでした。らいてうさんはいつも着物。曙生さんは結婚してもう鳥取に行かれて、敦史さんは入隊のころかしら、「行ってまいります」と幹部候補生の姿が印象的、いい男で憧れましたね。

らいてうさんは優しい声で「はるちゃん、ここやっておいてね」って、でも実家は百姓なので応接間を見たことないし、お掃除やってといわれて

も邪魔つけなものばかり、テーブルやら椅子やらあって動かすのが大変。らいてうさんは八畳か十畳ぐらいの部屋で、大きな机が一つに本がいっぱい、そこでいつも執筆していらしたの。ご飯の仕度もやりましたね。玄米食でした。

東京の空襲を心配する、らいてうさんのお姉さんの勧めで小貝川（現茨城県取手市）に疎開することになり、私もついていったの。実家と同じような田舎で、小貝川の三角地のところ。5月か6月頃お茶摘みしたことを覚えています。少しだけでもつたいないからって、カンカンの蓋で蒸してね、お茶をつくったの。「はるちゃん、新茶はおいしいわね」といわれ、そのときはよく憶えています。でも大家さんか近所の人に「この戦争は負ける」といわれ、いやになって帰ってききました。

らいてうさんの自伝『続元始、女性は太陽であった』に、1942年3月18日「お手伝いの娘キクミを連れて：茨城へ向け発ちました」とありますが、キクミさんではなく晴江さんであることが今回のお話で明らかになりました。晴江さんは「奥村はるさんがらいてうさんということは、戦後大分経ってから知りましたね。びっくりしていますよ、ほんとに。声が小さく、静かな人、私より小さく小柄だった」と。

晴江さんは20歳のとき、海軍の通信学校で電話交換手だった頃知り合った、お父さんが気に入ってよく働く人と結婚。当時アメリカ軍が入ってきて、「娘が一人でいるとさらわれるよ」といわれ、

お父さんは早く結婚させたかったのでしょう。でも夫は早く亡くなるし、子どもはいっぱいいるしで、がんばって働いてきたそうです。

今回のきっかけは元氣のもと、地域のおしゃべり会からでした。原田さん、安田さんにお世話になりました。（井上美穂子）

【事務局日誌】

- 10月2日 森の講座Ⅱ 菅平の歴史と自然散策
- 10月16日 第2回常任理事会
- 10月20日 第3回理事会開催
- 10月26日 東京国際女性映画祭で記録映画「平塚らいてうの生涯」上映
- 10月30日 レイラ化粧品創立40周年祝賀会に出席
- 11月2日 『青鞥』創刊百周年記念イベント実行委員会反省会（於真田林業会館）
- 11月4日 記録映画を上映する会理事会に出席
- 11月4日 「らいてうの家」に文京区長来館
- 11月7日 「らいてうの家」本年度閉館
- 11月8、9日 「家」大掃除・運営反省会
- 11月15日 「家」展示品収納作業
- 12月1日 記録映画を上映する会理事会 10年余の活動に終止符を打つことを決める
- 12月5日 紀要第5号編集委員会
- 12月14日 第3回常任理事会
- 12月18日 文京区主催『青鞥』創刊百周年記念講演会後援（於文京シビックホール小ホール）
- 12月19、23日 展示『青鞥』から現代へ わたしたちが引き継ぐもの（於ギャラリーシビック）